

開催報告

特別展

山水画と風景画のあいだ——真景図の近代

会期・2022年8月20日(土)～10月16日(日)

講演会「風景画の東西」

展覧会開催を記念して、宮下規久朗氏連続講演会「風景画の東西」が8月27日(土)、28日(日)の二日間にわたって行われました。

一日目は「西洋の風景画の成立と展開」と題して、古代から現代にいたる風景表現のうつりかわりについて、世界の名画の数々をたどりながらお話いただきました。西洋では東洋の山水画とは異なり、ジャンルとしての風景画が成立したのは17世紀のオランダと最近のことではなかったことを意外に感じられた方も多かったのではないのでしょうか。長らく古代ギリシャやキリスト教の美術が発展した西洋では、人が描かれない純粹な風景画が描かれるようになるまでに時間を要したということが、話を伺ううちにだんだんと実感できたのではないかと思います。また、アメリカやロシアの大画面の風景画のように、

なかなか見られない画家たちの作品を見るよい機会となりました。

二日目は「東洋の自然表現」について、中国の山水画の巨匠たちの作品を紹介し、中国から日本へもたらされた山水画の展開について、この度の展覧会出品作を中心にご説明いただきました。さらに近代以降の日本の風

景画について、西洋の風景画が日本で受容され、発展していく過程をたどりました。こちらにも、私たちが今日身近に描く風景画や、展覧会でもよく目にする山水画の日本でのうつりかわりを知ることができ、貴重な機会となりました。

この度は展覧会の来館者の皆様から、「江戸時代をはじめとした名品を目にすることができて感動した」といった感想が聞かれました。とくに人気を集めたのが狩野芳崖《馬関真景図巻》(個人蔵、下関市立美術館寄託)と高

橋由一の《琴平山遠望図》(金刀比羅宮)でした。講演会でも話されたように、風景画は見るものを別の世界に誘う、私たちにとってもっとも身近で魅力的な美術であると言えるのではないのでしょうか。

(学芸員 藪田淳子)



宮下氏講演会より



会場の様子



宮下氏講演会より

# 特別展 ビアズリーの系譜 アールヌーヴォー、 日本の近代画家たち

2022 11/19 (土)  
→ 2023 1/29 (日)

休館日：月曜日（祝日の1月9日は開館）、  
年末年始（12月27日～1月3日）

主催：下関市立美術館、読売新聞社、KRY山口放送 協賛：やまぐち文化プログラム  
観覧料：一般1,000円（800円）／大学生800円（640円）※（ ）内は、20名以上の団体料金 ※18歳以下の方  
および高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在学の生徒は無料 ※下関市内在住の65歳以上の方は半額

2022年はイギリスの挿絵画家、オーブリー・ビアズリー（1872-1898）の生誕150年に当たります。わずか25歳で早世したため、画家としての活動は実質5年程度にもかかわらず、時に1890年代が「ビアズリーの時代」と呼ばれるほど、ビクトリア朝末期の社会に強烈なインパクトを残しました。代表作である『サロメ』の挿絵を中心に、耽美的なイラストレーションの魅力を紹介いたします。また、アールヌーヴォーなど同時代の美術と、西洋美術の受容期にあった日本の画家たちの作品・資料から、近代美術史のもう一つの側面を読み解きます。



## ビアズリーと19世紀末美術

22歳のビアズリーが手掛けた、オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の挿絵。官能性と死のテーマが織りなすイメージは、発表されるや大評判となりました。とりわけ画期的なのは、その挿絵が物語の場面を説明するものではなく、テキストと等価な絵画世界として展開するものだった点にある。

姿は、シーンごとに変化し、一定しません。明らかにワイルドと分かる戯画が度々登場し、19世紀の読者が眉をひそめるような性的なモチーフも紛れ込んでいました。繊細で切れの良い線描と、時に余白を大きく取った大胆な構図は、多くを日本の浮世絵から学んでいます。ビアズリーはそれを独自の表現に発展させています。

ります。戯曲の舞台は聖書時代の古代パレスチナ。しかし、挿絵の中には「黒いケープ」や「サロメの化粧」のように、物語との関連がほとんど見いだせないシーンも含まれています。主人公サロメの

展示は『サロメ』のほか、画家デビューとなった『ステュディオ』創刊号、初期の作風を示す『アーサー王の死』、美術主任を務めた雑誌『イエロー・ブック』、『サヴォイ』などを集めて、ビアズリーの創作を紹介します。ビアズリーにインスピレーションを与えたジャポニスム、ラファエル前派の出版物と共に紹介します。

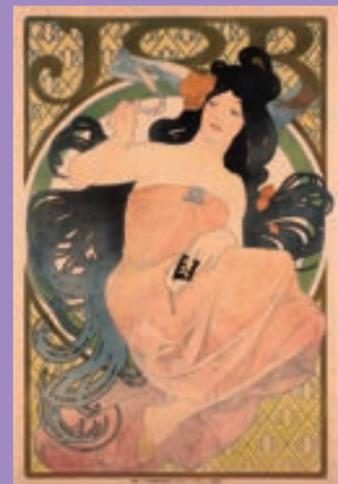
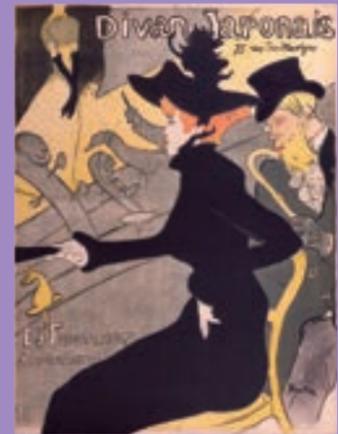
## アールヌーヴォーへの波及

曲線を多用した装飾的な様式で、ビアズリーとアールヌーヴォーの表現は軌を一にするとも言えます。印刷技術の発展を受けて、大判で多色刷りのリトグラフによるポスターが作られ、大いに普及しました。生前のビアズリーに関心を寄せていたトゥールーズ・ロートレック、アメリカのビアズリーことブラッドリーなどの同時代の作家たちを紹介します。アールヌーヴォーの作家ミューシャの作品は、華やかさの背後に潜む神秘性や象徴性に目を留めていきます。

19世紀末が好んだ女性像に、「ファム・ファタル（運命の女）」があります。男性を破滅させる魔性の女のイメージで、サロメはまさにその典型と言えます。

ビアズリーの最も素晴らしい才能は、あらゆる影響を吸収しつつ、自らの個性を維持し、発展させることができたことだ。

ジョン・ローゼンSTEIN  
（友人ウイリアム・ローゼンSTEINの息子）  
The greatest among Beardsley's gifts was his power of assimilating every influence and yet retaining, nay developing, his own peculiar individuality.  
John Rothenstein



一方で、現実の社会には、仕事を持ち、同伴者なしに出歩く「進歩的な」女性たちが登場しました。例えばビアズリーが『イエロー・ブック』で描いたパーティーに興じる女たちは、「新しい女」の典型に見えます。女性を巡る多義的なイメージに注目します。

## 日本の近代画家たちの世紀末美術受容

西洋美術の受容期にあった日本の美術家たちが、同時代の西洋美術から受けたインパクトも見逃せません。藤島武二や青木繁のアールヌーヴォー様式や象徴主義、橋口五葉や和田英作、竹久夢二の装幀デザインを紹介します。美術文芸雑誌『白樺』は、初期にビアズリー特集を組み（1巻3号「1910年」など）、日本にビアズリーを伝える上で大きな役割を果たしました。『白樺』を通して西洋美術に触れた岸田劉生や、雑誌『明星』や『方寸』、『月映』に関わる画家たちの作品・資料から、日本の近代美術がビアズリーから受け継いだものに迫ります。

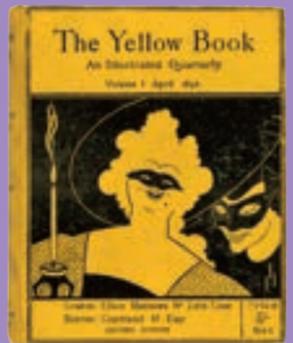
主任（学芸員） 渡邊祐子  
作品・資料点数 ビアズリー：『サロメ』挿絵17葉※を含む、約25点／全体：約200点  
※会期中一部展示替えあり。

グロテスクでなければ、  
私は何者でもない。  
If I am not grotesque I am nothing.



## オーブリー・ヴィンセント・ビアズリー Aubrey Vincent Beardsley (1872-98)

イングランド南部ブライトンの生まれ。ほぼ独学で美術を学び、日本の浮世絵の影響を受けながら、独自の様式を確立した。オスカー・ワイルドの戯曲『サロメ』の挿絵をはじめ、彼の作品には退廃的かつ官能的な雰囲気が満ちており、ビクトリア朝のイギリス社会に賛否両論を巻き起こした。美術主任を務めた『イエロー・ブック』のイラストも大評判となるが、ワイルドのスカンダルに巻き込まれ、同誌から追放された。晩年は体調の悪化と戦いながら質の高い創作を続けたが、結核により療養先の南仏マントンで没した。



作品画像（上より）：オーブリー・ビアズリー『サロメ』挿絵より『ダンサーの報酬』、『クライマックス』いずれも1894年 熊本県立美術館蔵、オーブリー・ビアズリー『イエロー・ブック』第1号表紙 1894年 下関市立美術館蔵

全く新しい描き方と構図を思いつきました。  
日本を連想させますが、完全に日本風という訳ではありません。  
…主題はかなり狂っていて、少々卑猥です。

## ビアズリーの作品から着想した イラスト作品を募集します

テーマ① サロメの「7枚のヴェールの踊り」／テーマ② 自由（限定なし）から一つを選び、イラストにしてください。ハガキ（14.8×10.0cm）以上、A3（29.7×42.0cm）以下の平面作品で、未発表の自作の作品に限ります。

応募は受付期間内（10月11日（火）～11月17日（木）9:30～17:00）に、出品票を添えて美術館に持参もしくは郵送で。応募の詳細や出品票は、美術館に設置するほかウェブサイトにも公開します。



参考作品

I struck for myself an entirely new method of drawing and composition, something suggestive of Japan, but not really japoneseque...  
The subjects were quite mad and a little indecent.



作品画像（上・左より）：アンリ・ド・トゥールーズ＝ロートレック『ティヴァン・ジャポネ』1892年、アルフォンス・ミュシャ『ジョブ』1898年、橋口五葉『はがき絵「花の香をかく女」』1905年頃 鹿児島市立美術館蔵、藤森静雄『亡びゆく肉（『月映』IV所収）』1915年 福岡市美術館蔵、藤島武二『みだれ髪（鳳（与謝野）晶子著）』表紙 1901年 かごしま近代文学館蔵、青木繁『女（しおり）』1904年 個人蔵（久留米市美術館寄託）

※所蔵元表記なしは下関市立美術館蔵



報告

■造形教室

「ステンシルで海のいきもののトートバッグづくり」

2022年7月18日(月・祝)

所蔵品展No.158特集「海と美術」に関連して海の日に実施した本企画は、富田一男先生(クラフト作家)にご指導いただき一般の部と親子の部の2回を開催、合わせて39名の方にご参加いただきました。大人も子供も時間を忘れ熱中している様子がとても印象的でした。



■夏休み子ども造形教室

「ぴかぴかの泥団子を作ろう」

2022年7月23日(土)・7月24日(日)

夏休みに入った最初の週末、3歳から小6まで、2日間で40名の子どもたちが泥団子づくりに挑戦しました。原井輝明先生(宇部フロンティア大学准

教授)の指導のもと、午前中に形成、午後に磨きと着色をして完成という一日がかりの講座でしたが、みんな最後まで目を輝かせて取り組んでいました。

一つ一つゆっくり丁寧に仕上げる人、たくさん作る人など形成時でも個性が発揮されましたが、彩色では様々な色を取り合わせたり、模様をつけたりと、柔軟な発想による独創的な泥団子もみられました。

また保護者の皆さまも楽しく参加して下さって、和気あいあいとした活気のある時間でした。



■博物館実習

2022年8月22日(月)~8月26日(金)

学芸員を目指す大学生4名が1週間、下関市立美術館で実習を受けました。美術館の運営について学んだり、美術館の様々な仕事を体験してもらったり、掛軸や巻物の取り扱いを練習したり...実習生も美術館職員もめまぐる

しい5日間でした。

美術館では中学生の職場体験学習や高校生のインターンシップなども受け付けています。このような体験を通して、より美術館を好きになってもらえるよう頑張ってまいりたいと思います。



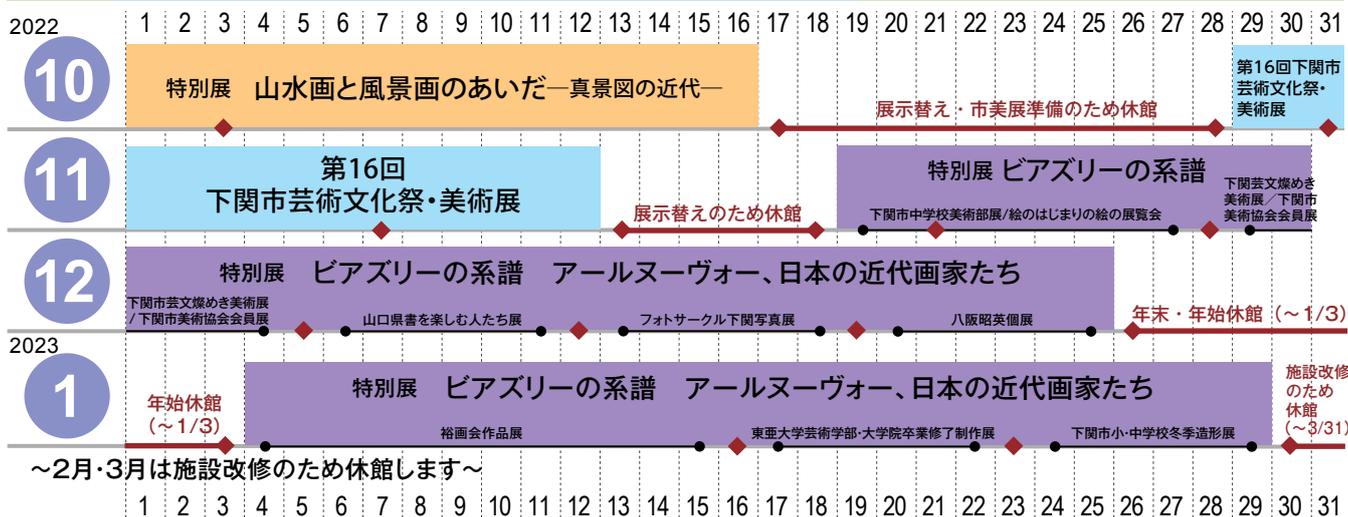
お知らせ

■一部の図録等の販売価格が改定されました

8月20日(土)より、美術館の売店にて取り扱っている図録のうち、2006年度までに刊行された40種類及び所蔵名品選、所蔵品目録の価格が改定されました。経年による劣化等がみられるものの、かなりお得に入手できるようになりました。対象書籍及び再設定価格は、美術館売店のほか美術館ホームページ内でもお知らせしています。(在庫がなくなり次第販売終了となりますのでご了承ください。)

下関市立美術館展覧会スケジュール(2022年10月~2023年3月)

会期・展覧会タイトルが変更になる場合があります。◆ 休館日



下関市立美術館NEWS